

会津・猪苗代両盆地周辺域の新第三系・第四系の代表的露頭

文 = 鈴木敬治・写真 = 編集部（1986年5月撮影）



翁島丘陵に分布する頭無火山泥流堆積物 <猪苗代町長浜東方の国道49号ぞいの切割り> 礫の径が数10cm以下の安山岩の角～亜角礫を多く含み、火山砂や火山灰とともに堆積している。一種の火砕流と考えられる。ところによっては、径数m程度の大きな礫を含み、一般に、風化はいじけるしくなく、新鮮である。この付近では、高度510m以下から600mまでの間に分布する。約5～6万年前頃に堆積したものと考えられている。	佐賀瀬川丘陵の塔寺層と赤色風化殻 <新鶴村佐賀瀬川付近> 会津盆地西縁の一部には、高度250～260mの小さな佐賀瀬川丘陵が分布する。ここには、砂・粘土・凝灰岩などの互層状の地層からなる塔寺層がきわめて緩い傾斜で分布し、かなり深くまで風化を受けている。その上部は、一般に赤色風化殻がかなりの程度に発達する。塔寺層は、更新世中期の約70～30万年前ごろに堆積した地層。	赤井谷地西方の丘陵性山地を構成する脊中炙山層の石英安山岩質凝灰岩 <会津若松市赤井小坂北> 約180～100万年前頃に堆積した下部更新統の脊中炙山層の中部の火砕流堆積物で、角礫と軽石を含む非溶結凝灰岩である。下部に数mの厚さのオレンジ色の降下火山灰層をとまなう（写真右端下部）。さらに、この降下火山灰層の下位に、脊中炙山層の下部にあたる、灰色の固結の進んだ非溶結の凝灰岩が分布するが、これも火砕流堆積物である。この地区より北の地域では、脊中炙山層の凝灰岩はほとんど非溶結のものであるが、より南の地域では、ほとんど溶結したものからなる。
只見川ぞいに露出する和泉層と七折坂層下部 <坂下町片門の只見川東岸の崖> この地点では、走向（地層の延びの方向）はほぼNから30°E、東に30°傾く。左下の砂岩・泥岩の互層の部分は和泉層の上部で、泥岩からは<i>Juglans cinerea var megacinerea</i>（オオバタグルミ）や<i>Pterocarya paliurus</i>（バリウルスサワグルミ）を産する。左下を除く画面大半の褐色がかった部分、礫層を主として、間に砂または軟質の砂岩をはさむ七折坂層下部。礫は大～中礫を主とするが、巨礫も含む。上部にオレンジ色がかった部分が僅かにみえるが、ここから上に、七折坂層を不整合におおって段丘堆積物、さらにその上位に沼沢軽石質砂層が不整合に重なって分布する。	阿賀川ぞいに露出する七折坂層下部と長井層 <坂下町袋原における阿賀川北岸> 砂（岩）や泥（岩）をはさむ下部更新統の七折坂層下部の礫層。西へ約30°傾く。礫は大・中礫を主とする。挟有される泥（岩）からは、オオバタグルミの堅果化石を大量に産出した。 上位に、傾斜不整合でかさなる礫と砂を主とする地層は更新世後期の段丘構成層で、長井層に属する。その上に、白っぽくみえている部分が、長井面をおおう約5,000年前の沼沢軽石質砂層であるが、この部分は淘汰が良好で風成層の疑いもある。	阿賀川ぞいに露出する和泉層と七折坂層最下部 <坂下町長井における阿賀川北岸> 左端に礫層があるが、これが七折坂層の最下部の礫層で、露頭の七折坂層はこの礫層の上位になる。 この礫層の下位には、軟質の砂岩・泥岩の互層を主とし、亜炭をはさむ和泉層の上部がつづいて重なっている。礫層は、浸食面と考えられる凹凸面を境にして和泉層の上にかさなるが、和泉層が大きく欠如している様子はない。このような凹凸面は、七折坂層や和泉層中にはしばしばあらわれる。和泉層は約400万年～約200万年前頃に堆積した鮮新統で、この層の上部からは、淡水生の貝・水草および樹木の遺体がよく産出する。
会津盆地西縁山地における藤峠層下部 <高郷村漆窪南方の林道の切割り> 走向N20°E、東に60°急傾斜する藤峠層の下部。砂岩・泥岩・細粒凝灰岩などからなる互層状の地層で亜炭層をはさむ。この露頭は、中新世後期末の約700万年前頃の地層で、基本的には16～17回の粗粒砂岩→中・細粒砂岩→泥岩（亜炭をはさむ）にいたるサイクロセム（小堆積輪廻層）からなる。 左方では傾斜が緩くなるようにみえているが、これは、切割りの面の方向が地層の走向にちかくなっているため、見掛け上ゆるい傾斜があらわれるためである。中・上部の6つの層準の泥岩から植物化石を産している。	標式地における塩坪層 <高郷村塩坪（画面の阿賀川は手前側が上流）> 手前の河床ちかくと山肌をのぞかせている部分が塩坪層上部で、走向はN30°～40°E、東に20°～30°で傾く。塩坪層上部は中粒砂岩を主とし、多くのサンドパイプや貝化石を含む浅海に堆積した地層である。 下流側を河中に地層がみだして露出する部分は、塩坪層下部の砂岩の優勢な泥岩との互層で、下部に凝灰岩の多い部分がある。互層中の砂岩から耶麻型動物化石群とよばれる貝化石群集を多産する。塩坪層は、中新世後期後半の約800万年前頃の地層で、この地層の堆積以降、会津地域が海域となることはなかった。	西会津町東部の漆窪層上部の硬質黒色泥岩 <西会津別茶屋付近の国道49号ぞいの切割り> 走向N20°E、東に60°で急傾斜する地層で、細粒凝灰岩などの薄層（白い部分や黄色の部分）をはさむ。この付近では、地層の厚さは70m～80mである。Cyclaminaほかの有孔虫や貝化石を産し、中新世中～後期（約1,200～900万年頃）に堆積したと考えられている。上部はシルト質となり、いくらか軟質となる。
会津盆地西縁山地の萩野層 <磐越西線荻野駅西方の石切場> 萩野層は、おもに鮮明な淡緑色の各種の凝灰岩よりなり、成層状態の明瞭なところが多い。約1,500万年前頃の海底火山活動の産物で、萩野層と同層準の凝灰岩類は会津盆地周辺に広く分布する。より古い時期の滝沢川層や闇川層などの緑色凝灰岩とは、色調・変質の度合などで特徴を異にする。萩野層中・下部の緑色凝灰岩は、石材として切りだされ、萩野石の名で知られている。	萩野層中部の淡緑色凝灰岩層で、かなりよく成層している。石英片や火山ガラスの礫が多い酸性の凝灰岩である。 萩野層下部の淡緑色凝灰岩のアップ。岩質は中部のものと同じ。数cm以下の火山ガラス礫を多く含む部分と少ない部分とが成層している。級化しているところも多い。	猪苗代湖東岸山地北部の破碎された淡緑色凝灰岩、大久保層（上戸凝灰岩） <猪苗代町上戸> 川桁断層のすぐ東側の山地域に分布する凝灰岩からなる上戸凝灰岩層の一部であるが、いちじるしく破碎されている。川桁断層の形成に関連して生じた破碎構造であろう。画面の中央部には、すべり面と考えられる鏡肌がみられる。萩野層と同じ層準の地層の一つである。